HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	シェイクスピア劇の仕掛け : 「十二夜」の2人の女性
Author(s)	宮下, 弥生
Citation	北海道新聞
Issue Date	2010-09-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/43947
Rights	北海道新聞社許諾D1009-1103-00006831 本著作物は、北海道新聞社の許可のもとに掲載しています。
Type	column
Note	上：2010年9月14日夕刊掲載 下：2010年9月15日夕刊掲載
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	miyashita_3.pdf (下)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道新聞（夕刊）　第3種郵便物認可

シェイクスピア劇の仕掛け

「十二夜」の2人の女性

＜下＞

ヴァイオラの男装 報われぬ恋心 雄弁に表現

宮下　弥生

シェイクスピア劇は基本的に登場人物一人一人の思いを表現する科白の連続のみから成り立つのだが、そこには劇の効果を狙った仕掛けが別次元で組み込まれているのだ。「十二夜」の主人公の一人、ヴァイオラは難破してイリリアの海岸に打ち上げられ、男装してこの土地の公爵オーシーノーに仕えることになる。このオーシーノーは女伯爵オリヴィアに求愛しているのだが、1幕4場、ヴァイオラは仕えて3日目だというのに、すでにオーシーノーを好きになってしまっている。一方のオーシーノーにとっても、ヴァイオラは他の家臣たちを退け、一番お気に入りの家臣となっている。だが、オーシーノーは、男装してシザーリオと名乗るヴァイオラに女性的なものを認めつつも、まさか女性だとは思わず、自分が愛するのはオリヴィアだと信じて疑わない。

公爵　だれか、シザーリオを見かけなかったか？／**ヴァイオラ**　ここに控えております、公爵。／**公爵**　ほかのものはさがっておれ――シザーリオ、／おまえにはすべてをうちあけた、おれの胸の／秘密の扉をおまえにだけは開いてみせた。／そこで頼みがある、あの人のところに行ってくれ、／ことわられても門の前を離れるんじゃない、／お目どおりがかなうまでは足に根が生えても／動きませんと言うのだ。

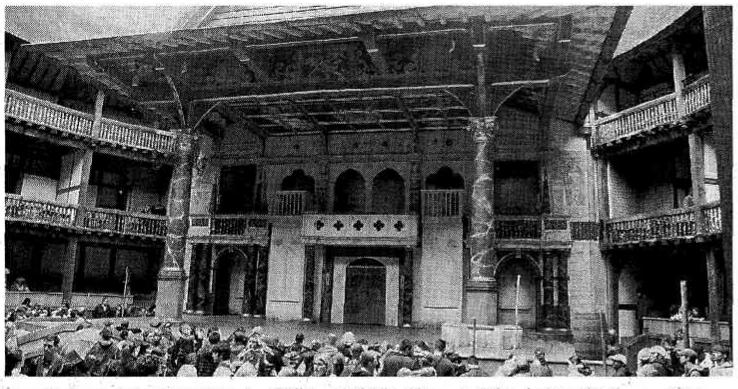
そして、ヴァイオラはオーシーノーの使いとしてオリヴィアの屋敷に行き、オリヴィアは男装したヴァイオラに一目惚れしてしまう。こうして、「十二夜」の恋の三角関係＜オーシーノー→オリヴィア→ヴァイオラ（シザーリオ）→オーシーノー＞は形成される。最後に、難破で生き別れになったヴァイオラの双子の兄セバスチャンが登場して一気に問題が解決するまで、劇中、それぞれが報われない恋心を吐露するのだが、ヴァイオラだけは男装しているため自分の恋心を直接表現することはできない。2幕4場。

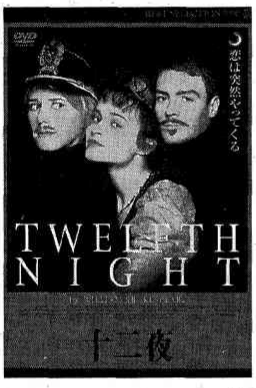
ヴァイオラ　私の父に娘がありまして、ある男を愛しました、／私が女でしたらきっとあなた様に抱いたであろうような、／深い愛でした。／**公爵**　でどうなった、その恋物語は？／**ヴァイオラ**　白紙のままです。自分の恋をだれにも言わず、／胸に秘めて、つぼみにひそむ虫のような片思いに／バラの頬をむしばませたのです。そして次第に／やつれていき、病み蒼ざめた憂いに沈みこみ、／それでも石に刻んだ「忍耐」の像のように、悲しみにほほえみかけていました。これが愛です、まことの。……／**公爵**　それで恋ゆえに亡くなったのか、父上の娘御は？／**ヴァイオラ**　いまは私一人となりました、父の娘も、／息子も。はっきりしたことはまだわかりませんが。……

観客／読者はヴァイオラの男装の事実を知っているため、「父の娘」とはヴァイオラ自身であることがわかる。「私の父に娘がありまして、ある男を愛しました（→私はあなたを愛しているのよ）、私が女でしたらきっとあなた様に抱いたであろうような、深い愛でした（→こうして男性として仕えている私の深い愛はあなたもご存じのはず）。」。だが、男装の事実を知らないオーシーノーにヴァイオラの告白は届くはずもない。

男装ゆえに、オーシーノーはどんなにヴァイオラ（シザーリオ）を可愛く思っても、男性だと信じて疑わない。男装ゆえにヴァイオラはオーシーノーの愛の対象となりえないことも知っているし、自分の気持ちを伝えることもできない。自分の気持ちを「父の娘」の気持ちにすり替えることでなんとか表現しても、男装ゆえにオーシーノーの心には届かない。だが、ヴァイオラの男装を知らされている観客／読者は、ヴァイオラの切ない恋心、信念を曲げない意志、そして、その想いが決してオーシーノーの心には届かない事実、すべてを同時に味わうことになる。ヴァイオラにとっては（身を守ることを除いては）障害以外の何物でもない男装が、逆に劇の仕掛けとしては、彼女の恋心を雄弁に表現し、観客／読者の心をゆさぶる手段となっているのである。

（みやした・やよい＝北大大学院文学研究科助教）





㊤復元されたグローブ座（ロンドン）。グローブ座では数多くのシェイクスピア劇が上演された㊦恋の三角関係を繰り広げる（右から）オーシーノー公爵、オリヴィア、男装したヴァイオラ＝映画「十二夜」のDVD

道新文化センター提携講座・コーチャンフォーアカデミー教室で、宮下さんは「シェイクスピアへの招待―『ハムレット』を読む」（10月6日㈬から）の講師も務める。申し込みと詳細は同センター☎011・241・0123へ。